

# 私見創見 Saturday

家庭医にとつて漢方薬は便利な薬である。風邪や胃腸炎から認知症まで、さまざまな症状に使える上、複数の身体症状とそれに伴う心の状態まで一つの漢方薬で解決できる

も小児在宅医療の研修会で、「抑肝散を子どもに使うことありますか?」という質問が出て驚いた。この薬、もとは子どもが夜泣きや疳の虫に使われる薬なのだが、面白いことに、漢方の古典「傷寒論」には、「母兒同服」、つまり母親にも同時に飲ませないと書かれている。

子どもが夜泣きや疳の虫を起こしてしまう時、母親も不安を抱えていることが多いと、既に大昔の中国でも知られていたのだ。子どもの気持ちを静めるために親のケアも行うとは、現代の家庭医もびっくりの家庭医学的アプローチである。その慧眼に驚かされる。同時に、今も昔も子育てには大きな不安が伴うことをあらためて認識させられたい。

## 親の不安なくせる社会に

現在でも、子育ての不安に尽きない。喜びの方がはるかに抑うつなどの症状を起こす人は多い。うつでなくとも、仕事との両立や家庭内の役割分担、経済的な悩みなど、子どもを持つ親の不安は

大きいとはいえず、保育所が大きな不安を抱えているのには家庭だけではない。諸外国に比べて多くの生徒を少数の教職員が担当している日本の教育現場では、その負担も非常に大きなものとなっている。

経済的に発展した国の集まりである経済協力開発機構(OECD)の統計によると、日本の公立学校の1クラス平均人数は、小学校で加盟国中3番目、中学校では2番目に多い。その一方で、教育機関への公的支出の国内総生産(GDP)に占める割合は、加盟国平均の4.7%を大きく下回る3.7%で、加盟32カ国中5年連続最下位である。さらにこの統計は、日本では有料である幼稚園や保育園などの就学前教育を除いた統計であり、これを無償化する国が増える中であって、世界一少子化が進んでいながら、世界一教育への支出が少ない日本の現状は、まさに異様とも言える。

## 子育て環境

小倉 和也

はちのへファミリークリニック所長



おぐら・かずなり  
1972年生まれ。2010年に国内でも珍しい家庭医療の医院を八戸市で開業。国際基督教大、琉球大医学部卒。八戸市出身。

「ティー」を課せられているよ。うだとの声も聞かれる。大きな不安を抱えているのは家庭だけではない。諸外国に比べて多くの生徒を少数の教職員が担当している日本の教育現場では、その負担も非常に大きなものとなっている。子どもを持つ親と同じように、肉体的にも精神的にも疲弊してしまい、医療機関に助けを求める教職員は後を絶たない。公立学校だけでも全国で年間5千人以上の教職員がうつ病などの精神疾患で休職を余儀なくされている現状からも、その余裕のなさを伺い知ることができる。

国が提唱する「一億総活躍社会」では、男性も女性もその選択によって、子育てや介護をしながらでも仕事を続けられることが求められる。それは国の経済を活性化させるためではなく、働く一人一人の自己実現と、介護を受ける高齢者や、育てられる子どもたちのより良いあり方を目的とするものであるはずだ。子どもは社会の未来を担う存在であるばかりでなく、その置かれる環境は、社会の現在を映す鏡でもある。介護保険制度によって高齢者の介護は、家族だけでなく社会全体で担われるようになった。子育ても親が責任を抱え込むのではなく、子どもを社会の財産として、社会全体でその育成を担っていく必要がある。21世紀の日本は、不安なく子育てができる社会にしたい。かなければならない。